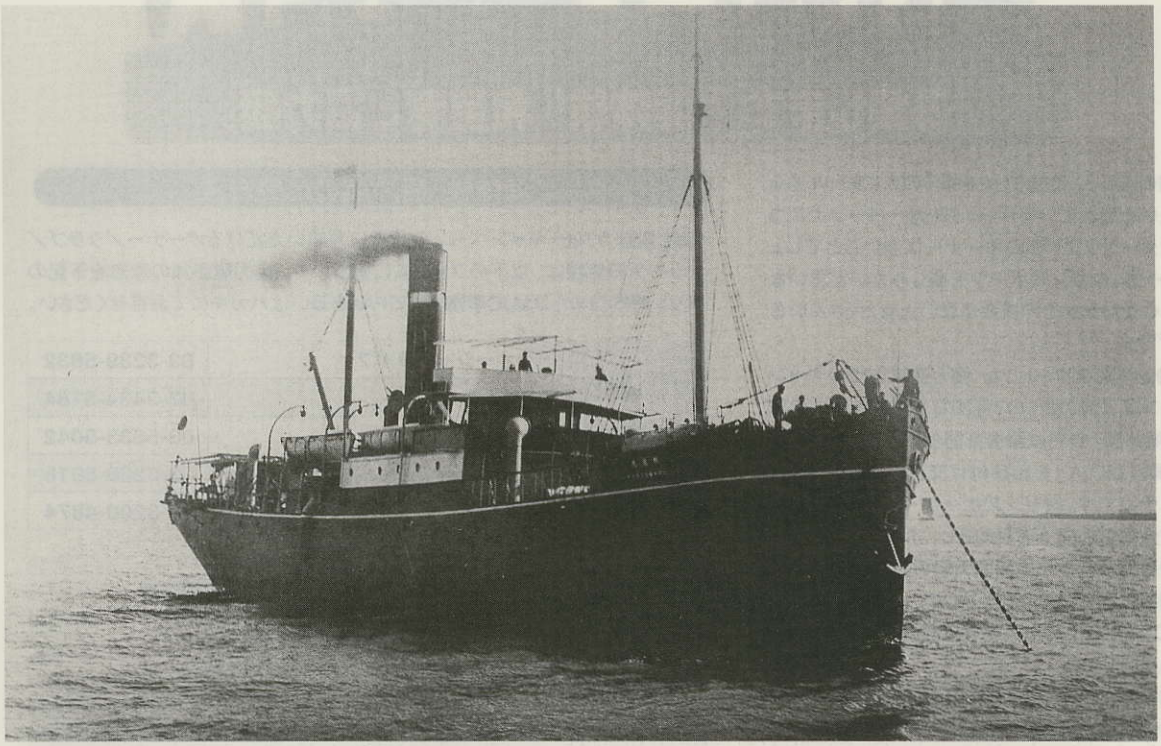
蛟龍丸

《主要目》貨客船、藤野四郎兵衛所有、鋼製、746総トン、1,007重量トン、垂線間長54.9m、幅8.2m、主機三連成汽機1基、最高速力11.0ノット、1903年大阪鉄工所建造

大正期の青函航路で活躍した日露戦争の大殊勲船



新造時の蛟龍丸（小林義秀）

チャーター船時代の青函航路

大正時代の青函連絡航路は、多くのチャーター船によって支えられた。「用船時代の青函航路」と呼ばれるゆえんである。

国鉄が一四八〇総トンの「比羅夫丸」「田村丸」を投入して青函航路を開業したのは一九〇八（明治四十一）年。その二年後、ライバルだった日本郵船の青函航路が廃止された。旅客・貨物は国鉄に集中した。

さらに大正期に入ると、北海道の経済発展で客貨需要が増大し、「比羅夫丸」クラスの積載能力ではとても対応できなくなった。

国鉄はどうしたか。チャーター船でこれをしのいだのである。この状態は、日本で最初の客載車両渡船の「翔鳳丸」クラスが青函航路に登場する大正末年まで続いた。

こうして青函航路の助っ人連絡船となったチャーター船の中には、面白い船歴をもった船が何隻かある。今回の「蛟龍丸」（こうりょうまる）も、そういう一隻である。

「蛟龍丸」が青函航路で活躍したのは、第一次大戦時の一九一六（大正五）年六月から一九年四月までの約三年間である。

大戦中の船不足による内航貨物の鉄道シフトで、青森と函館両駅は滞貨が山をなしていた。「蛟龍丸」はこれらの貨物の輸送に当たっ

たほか、六十三名定員の客室を設けて、移住民と出稼ぎ労務者の輸送にも従事した。

日露戦争で特設敷設艦に変身

「蛟龍丸」は日露戦争の前年の一九〇三（明治三十六）年九月に大阪鉄工所桜島工場で進水した七四六総トンの鋼製汽船である。船主は大阪の藤野四郎兵衛で、北海道沿岸航路に就航する予定だった。ところが、翌一九〇四年二月に日露両国が戦端を開いたことから、竣工後まもなく海軍に徴用された。

日本海軍の当面の敵は、旅順のロシア太平洋艦隊だった。バルチック艦隊が欧州から加勢にやってくる前に、これに大きなダメージを与えなければならなかった。

三月に名提督マカロフが司令長官に着任すると、それまで旅順港内に自重していたロシア艦隊は、沿岸のロシア砲台の支援射程圏内まで積極的に打って出るようになった。

その行動を観察した日本海軍は、ロシア艦隊の航行ルートに機雷を敷設することを考えた。敵の砲台下で仕事をするのだから、たいへん危険な作業である。そしてこの任務のため、「蛟龍丸」と、第四～五駆逐隊、第十四艇隊に属する十二隻の艦艇が選ばれた。「蛟龍丸」は急ごしらえの特設敷設艦に変身。船尾に機雷投下装置が設けられた。

旅順港外の機雷戦で大戦果

機雷敷設は四月十二日深夜に行われた。投下した機雷は、下瀬火薬を使った二号機雷である。「蛟龍丸」には、この機雷の開発に携わった小田喜代蔵中佐が総指揮官として乗船した。幸いこの夜は雨で視界が悪く、敵の探照灯で発見されることもなかった。

翌十三日午前十時すぎ、旅順港外に出動したマカロフ提督の座乗する旗艦「ペトロパブロフスク」が、前夜敷設した日本の機雷に触れ、瞬時にして轟沈。マカロフと六百数十名の将兵が艦と運命をともにした。さらに約三十分後、旗艦を引き継いだ戦艦「ポビエダ」も触雷大破し、旅順港内に逃げ込んだ。

大戦果だった。以後、太平洋戦争終結までの四十余年間、日本海軍がこれに匹敵する大戦果を機雷戦で挙げることはなかった。

日露戦争の殊勲船ということでは、「蛟龍丸」は、バルチック艦隊を発見した「信濃丸」に勝るとも劣らない存在なのである。

大阪～済州島航路の定期船へ

「蛟龍丸」は青函航路で活躍していた時期に、函館の成田商会の手に渡った。

昭和に入って、「蛟龍丸」が海事史の舞台に登場する場面がもう一度あった。韓国の済州島と大阪を結ぶ航路（阪済航路）が、その舞台である。日本統治下のこの時代、阪済航路の定期船は、済州島出身の大勢の出稼ぎ人たちでいつも込み合っていた。

阪済航路は日本船が独占していた。朝鮮郵船の「咸鏡丸」（七五一総トン）と、ロシア砲艦を改造した尼崎汽船部の「第二君が代丸」（九一九総トン）で、船賃は十二円五十銭だったという。出稼ぎ人の月収が十数円の時代だから、高い船賃である。そこで、大阪の済州島出身者たちは東亜通航組合を組織し、自前の船を運航することを計画した。

東亜通航組合にチャーターされたのは、成田商会の「蛟龍丸」だった。この時期の同船には、一等四名、二等十三名、三等二百五十九名の客室が設けられていたのである。

「蛟龍丸」が就航したのは一九三〇（昭和五）年十一月。船賃は日本船の半分の六円五十銭だった。当然、済州島出身者たちは「蛟龍丸」を利用した。そして以後、日本船との間で熾烈な料金競争が行なわれた。

「蛟龍丸」は海難で失われた。太平洋戦争勃発の年の六月、北千島学術調査隊を乗せて千島海域を航海中、ウルップ島沖で座礁沈没し、その波乱の生涯を閉じている。

山田　廸生